

韓国村落の共同的要素

渋谷 鎮明*

1. はじめに

韓国における村落景観の研究では、同族村落、すなわち村落の住民の多くが同姓同本¹⁾で、しかも同族的な結合がみられる村落が注目され、特殊な文化景観を構成する要素として同族の祖先祭祀の施設などが取り上げられてきた²⁾。これら同族村落の景観研究は確かに重要であるが、同族的結合の弱い村落、あるいは同族村落以外の村落などでは、それらの景観はあまりみることはできない。

そのような要素のみられない一般の村落では、同族祭祀・同族内での利用とはあまり関係のない洞祭³⁾を行う場所など、地縁的に共同所有・共同利用される施設が多くみられる。この共同の施設は、韓国的一般の村落の景観を見る際には重要であろう。

張保雄はこのような、村落において共同利用がなされる施設などを「有形的な要素」としている⁴⁾。ここでその有形的な要素を分類すると、同族的結びつきが強い村落において、同族が所有・利用する「同族的要素」と、村落内の住民が、あまり同族組織とは関係なく共同利用する「共同的要素」に便宜的に分類できると考えられる。

「共同的要素」は「同族的要素」に比べ、ほとんどの韓国村落において見られるもので

あり、また地縁的なつながりを示すものであるがゆえに、これらを整理しその機能について理解することは、基礎的な作業として重要である。すなわちこの共同的要素の研究は、①韓国的一般の村落景観を捉えるため、またそれだけでなく、②韓国的一般の村落における地縁的結合をとらえる一助となるであろう。

特に地縁的結合の場として重要なものが洞祭の場としての「堂山」であり、これについては次章で詳述するが、社会学者の崔在錫は、鈴木栄太郎の「自然村」概念に対して彼が提唱した「自然部落」概念の指標の一つとして、「洞祭を共同で行う範域」をあげているが⁵⁾、やはりこの「堂山」も同族とはあまり関係なく、村落住民の共同的利用がなされているという点から、本稿で扱う共同的要素であるといえる。

同時に「堂山」をはじめとする共同的な要素は、植民地時代や現代の韓国の経済発展やそれにともなう人口移動、あるいはセマウル運動などの農村の変貌とともに、近年大きく変化している。

一方、日韓の村落の比較を視野におくときに、上記のような視点を通して、現在の韓国の村落像を捉える必要があり、そのためにもこの共同的要素は重要である。

そこで本稿では、韓国の村落像を捉えるための基礎的作業として、韓国多くの村落の

* 名古屋大学大学院

景観の一部分をなし、地縁的結合とも関連する「共同的要素」を取り上げ、その特性を明らかにすることを目的とする。具体的には、筆者が参加した韓国村落に対する予備的調査⁶⁾をもとに、共同的要素を文献などを通して整理・把握し、それらの変遷について考察した後、そのうち2つの要素について地域的分布をとらえ、地域的な相違を明らかにする。

2. 村落内の共同的要素とその機能

前章でも述べたように本稿では韓国の村落にみられる「有形的な要素」のうち、「同族的要素」と対置される「共同的要素」について把握しようとするが、ここでは共同的要素は、村落内において住民が共同で所有するか、あるいは共同で利用する有形的な要素のことを示す。

このような共同的要素は、前述の予備的調査において、堂山（城隍壇）、鎮山、洞藪（裨補林・樹帯）、喪輿舎、共同墓地、亭子木、茅亭、セマウル会館・倉庫、共同井戸、共同洗濯場、農業用貯水池が確認できたため、これらについて、どのような点で共同的であるかに注目しながら、その機能、村落内の位置、形態などを以下に順次述べる。

第1に村落で共同で行われる信仰の対象としての共同的要素について述べる。

まず前節でも例示した堂山（城隍壇）は、村落全体で洞祭を行う場所であり、これはたいていの村落に1つないしは複数存在し、韓国では村落住民の信仰の対象として普遍的なものである。その点においては日本における神社に対比される⁷⁾。この堂山（城隍壇）で

行われる洞祭は、民間信仰の一つとして位置づけられ、一般に年1回以上定められた期日に、村人から選ばれた「祭官」を中心として執り行われる。当日は祭物、拝礼、あるいは祝文を読み上げるなどをし、祭の後に村人全員で共飲・共食をするものである⁸⁾。この洞祭の費用は、洞番といわれる洞祭のための共同の水田があつてその収穫から捻出される例もある。また祭る神は村ごとに一定していないが、代表的なものとして山神、城隍神などがあげられる。

前述のように社会学者の崔在錫は、「自然部落」という概念を提唱するにあたって、この洞祭を行う範囲をその指標の一つとしてあげており、韓国村落社会を捉える際にもこの堂山（城隍壇）は重要である。

この堂山（城隍壇）にはさまざまな形態があり、その多くは神木、堂舎、石積み、あるいは岩、石像などの組合せによって多様性が形成される。神木は、堂木ともよばれ、巨樹・老樹が多く、注連縄が巻かれている場合が多い。堂舎は多くの場合その内部に祭壇をもった小屋であり、内部には住民の信仰する神の絵などが収められている場合もある。また石積みは大規模なものになると、堂舎などを囲んで石垣のようになっているものも見られる。そして供物のおかれる祭壇は場合によって、神木の根元、堂舎の中、石積みの中などにおかれる。

調査に訪れた村落では、神木のみ、堂舎のみ、石積みのみ、岩のみのものに加えて、神木+堂舎、神木+石積み、神木+岩、堂舎+石積み、神木+堂舎+石積みの9例が確認された。各々の割合を見ると、堂山（城隍壇）は46村落に確認されたが、その46例のうち、



第1図 村落背後の山の上にある堂木(神木)
(忠清南道保寧郡藍浦面三賢里)

24例が神木のみがあるもの（第1図）で最も多くみられた。次には神木と堂舎があるものが9例みられた。また特殊な例としては、石積みの中に石像がみられるものもあった（第2図）。また堂山（城隍壇）の位置はおもに村落の入り口、家屋群の中心や縁辺部、背後の山の上などに見られる。

次に鎮山であるが、これは村落の背後にそびえ、村落の守護神が住む山である。この鎮山を共同的要素と分類したのは、特に村落住民が共同で山を所有・利用しているためではなく、信仰の対象として住民が捉えていると考えられるためである。それは、祈雨祭や山祭を行なう祭壇が作られている例があることからも推測できる。また鎮山は風水地理説⁹⁾では「主山」とも呼ばれ、やはり村落の背後に



第2図 村落入口にある城隍壇
中央に石像がある。(江原道溟州郡邱井面邱井里)

ある山として位置づけられ、特に風水地理説について知識のある人間がいる場合に村落の鎮山は認識されている。植民地時代に風水地理説について調査を行った村山智順は村の守護神としての鎮山は風水地理説の流入以前から認識され、そこに後から風水地理説が流入したと推測している¹⁰⁾。

洞藪は、村落の周囲に作られた人工林で、他に裨補林あるいは樹帯などと呼ばれる場合がある（第3図）。これはおもに防風・防砂・あるいは遮蔽物としての機能をもっている。また一方ではそのような実利的な機能の他に、風水地理説からみて、村落の周囲の地形・地勢などが良くなかったり、欠陥がある場合に



第3図 村落を遮る洞藪
(江原道洪川郡西面屈業里)

それを補足する目的で作られる場合もある。特に風水地理説に基づいて作られる人工林は裨補林と呼ばれる。その位置は、村落が谷あるいはある場合には、その側に沿うようによられる。また洞藪は上記の堂山などがその中にあり洞祭を行う聖域になっており、普段は立ち入りが禁止されていたという事例も報告されている¹¹⁾。また安東地方などの歴史の古い村落では、洞藪が風水信仰を通して、祖先崇拜と結び付き愛着をもって保全されている¹²⁾。

第2に葬儀に関連して共同利用されるものについて述べる。

喪輿舎は葬儀の際に使用される輿（こし）を収納しておく建築物であり、村落から多少離れた斜面などに作られていることが多い。これは葬儀という村落の多くの住民にかかわる行事に関連し、また喪輿が共有されているという点で、共同的要素に分類できる。

また共同墓地も葬儀に関連して、共同利用される場所である。これは墓を作る自分の山をもたない住民や、縁故の無いものが亡くなった場合に埋葬する場所であったが、最近では墓地問題ともからんで、増加している。

第3に休息の場として共同利用される共同

的要素についてのべると、まず茅亭は農地内や村落内の広場に作られる建築物で、おもに農作業時の休息や共同作業、あるいは集会所などとしての機能をもち、一般に壁のない高床式の建物である（第4図）。その呼称には様々あって、「茅亭」が一般的であるが農亭、農序、涼序などとも呼ばれており、一般に水田地帯に多いとされる¹³⁾。その位置は村落の入り口や農地の中の畦などにあり、後述する亭子木などの樹木の下に作られるものもある。また一部の村落には同族の所有する「亭閣」あるいは「亭子」などと呼ばれる休息や集会などに使われる建築物があるが、茅亭はそれらとは違い農業などと関連している。

亭子木は、村落の各所にある大きな独立樹で、おもに休息などに使われ、茅亭がその下に作られている場合もある。洞祭が堂木と呼ばれる巨樹の周りで行われる場合、亭子木との相違が見ただけでは理解しにくいが、堂木の場合供物を捧げるための祭壇や注連縄があることによって区別できる。慶尚南道陝川群双柏面三里では葬儀の際に、亭子木の周りに葬儀に訪れた人が集まり、飲食をしていた（第5図）。

第4に、生産・一般生活に関連して共同利



第4図 亭子木の下に作られた新しい茅亭
(全羅北道扶安郡下西面老谷)



第5図 亭子木の下に集まる葬儀の参加者
(慶尚南道陝川郡双柏面三里)

用される要素について述べる。

セマウル会館・セマウル倉庫は、1970年代に始まったセマウル運動とともに作られた建築物で、セマウル会館には小売店が作られる例も多く見られる。セマウル(新しい村)運動は都市と農村の格差の是正をねらいとし、農村の生活環境の改善、所得の増大、生産力拡大などを目指すものであった¹⁴⁾。その事業の一環として、もとからあった集会所である「会館」の場所に新しくセマウル会館・倉庫が建設されたが、これらはおもに村落の中心、広場などに作られており、精米所などもそれに隣接して作られる場合がある。

共同井戸は古くから存在するが、セマウル運動の時期に上水道整備の一環で整備されている。また共同の洗濯場は村落の周辺の川・水路沿いにあり、コンクリートで洗い場が作られているものも見られる。さらに茂みや岩などに隠され、道から離れたところには水浴び場がある場合もみられる¹⁵⁾。

以上のような共同的要素が調査で見ることのできた主要なものであった。

3. 共同的要素の変遷と地域的相違

上記の共同的要素が現在の村落でみることのできるものであるが、近代化・セマウル運動などを通して伝統的なものが少なくなる傾向にある。また一方では韓国で近世にあたる朝鮮時代（李朝時代）に強まった儒教的な祖先祭祀が流入する以前から存在する要素もある。そこでまず共同的要素の変遷について述べると以下のようになる。

堂山（城隍壇）、鎮山、あるいは山祭場といった民間信仰に関連するものは、儒教流入

以前から存在すると考えられ¹⁶⁾、その後も現在まで存続している。また同様に洞藪、裨補林といった人工林も、それらが作られた時代が古いことは、巨樹・老樹が多いことからも推察できる。例えば京畿道実村面水陽里では、初代の居住者が植樹したといわれる林があり、300年を越す樹齢の古木が含まれている¹⁷⁾。そして儒教が流入した後に、本稿では取り上げなかった祖先祭祀に関する「同族的要素」が建設された。

その後、日本による占領時代には、神社参拝が矯正されたため、堂山（城隍壇）をはじめとする民間信仰施設が、「迷信」とされ、なくなる傾向もあり、その一方で共同井戸や農業陽の貯水池、共同墓地などが作られる例もあった。

これに対し、セマウル会館・セマウル倉庫、また共同井戸、特にコンクリートで整備されたものなどはセマウル運動の事業によって作られたものであり、非常に新しい要素である。

近年、洞祭をはじめとする伝統的な祭祀・信仰やそれに関する要素は、日本占領下の政策からはじまり、その後の近代化、あるいはセマウル運動とともに衰退してきている。たとえば堂山などは、神木はあっても祭を行わなくなっている村落もみられ、またかつて山で行っていた祈雨祭などもなくなってきている。これは日本の占領や解放後の離農向都型の農村から的人工流出などにともない、若年層が伝統行事から離れていったこと、また一方でセマウル運動の時に新しい農村社会の建設を強調したことがあげられ、とくにこのセマウル運動の時には「迷信打破」の標語のもとに、伝統的な宗教儀礼や民族的行事が廃止になる例がみられ、そのため洞祭が廃止

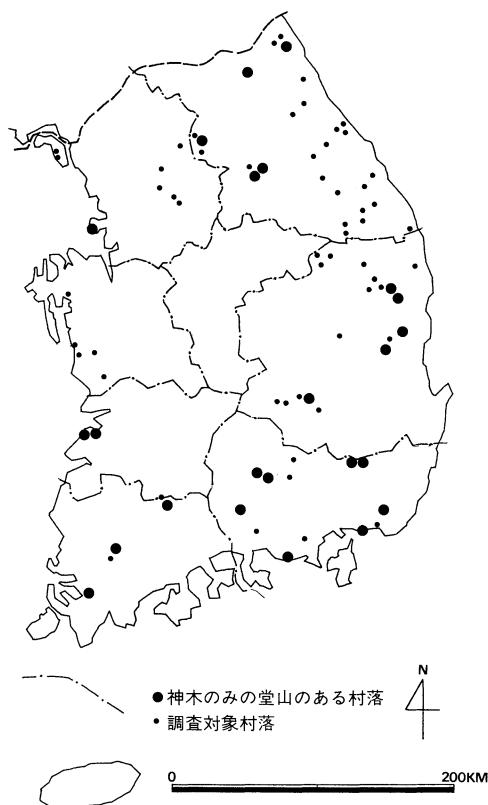
された村落もあった¹⁸⁾。そして堂山を中心とした要素がなくなって行く一方、セマウル会館・倉庫などが作られた。このように日本の占領政策、近代化、1970年代のセマウル運動は韓国村落の景観および共同的要素に大きく影響を及ぼしてきたといえる。

またこのような共同的要素は、確かにどのような村落にもみられるように、一般にはとらえられているが、分布に地域的偏りがあるもの、またその形態が地域によって異なるものがある。

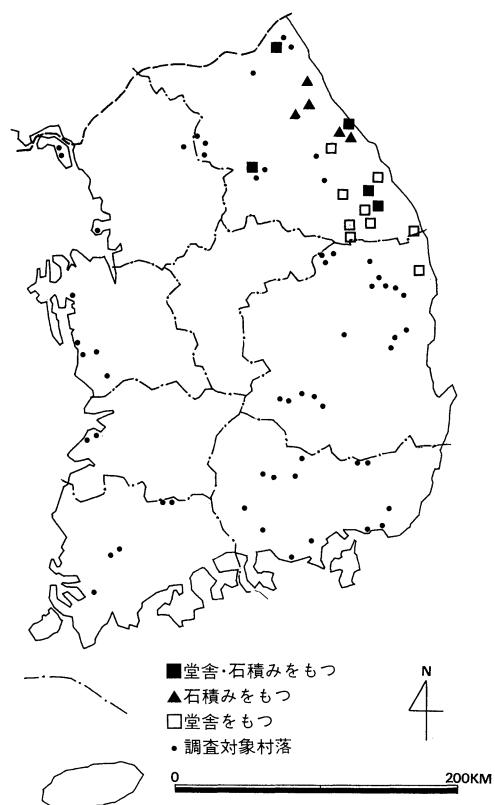
そこで次に共同的要素の地域的相違について、前述の調査結果をもとに、地域的相違が特に現われるもののうち、村落内の共同施設

として重要な①堂山（城隍壇）および、特殊な景観を形成する②茅亭の2つの要素について述べて行きたい。但しここで使うデータは、予備的な調査によるものであり、各村落で全ての要素を捉えきっていない場合があることを付記しておく。

堂山（城隍壇）の形態の地域的相違を、堂山（城隍壇）が確認できた村落の分布から見ると第6図、第7図のようになる。まず第6図は堂山（城隍壇）のうち、前節で示した「神木」のみが信仰の対象になっているものを示しているが、慶尚道・全羅道地方に比較的多くみられることがわかる。それに対し、第7図に示した堂舍、石積みをも信頼対象とする



第6図 神木のみの堂山（城隍壇）がある村落の分布（調査結果より）

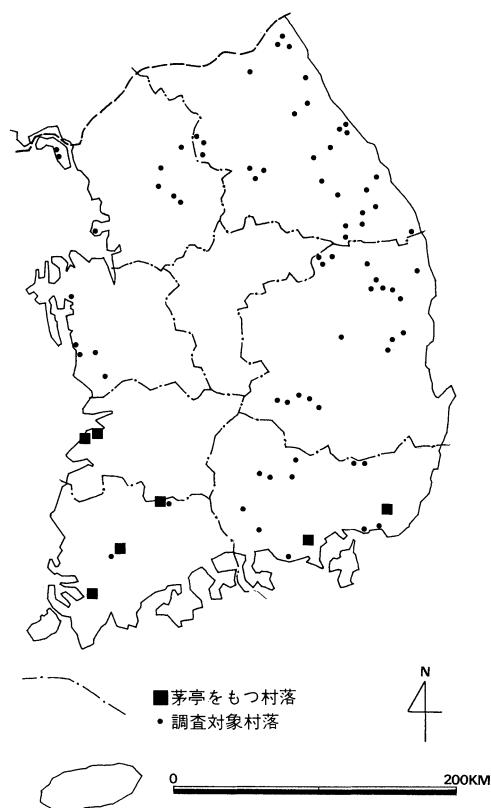


第7図 堂舍、石積みをもつ堂山（城隍壇）のある村落の分布（調査結果より）

ものは、江原道地方に偏在していることがわかる。また、洞祭を行う場所の呼称は、江原道地方では城隍壇 (Seo-nang-dan) と呼ばれる例が多く、全羅道、慶尚道地方では堂木 (Dang-na-mu) と呼ばれる例が多かった。

次に茅亭をもつ村落の分布をみてみると第8図のようになる。茅亭をもつ村落は全羅道地方、慶尚南道地方にみられる。張 (1981) の研究でもこの茅亭は、全羅南道地方の村落に多く、全羅道地方はいわば「茅亭文化圏」であると述べられている¹⁹⁾。そしてこの場合には、亭子木に茅亭が近接してつくられているものが多い。

以上のように韓国村落の共同的な要素は、



第8図 茅亭をもつ村落の分布（調査結果より）

セマウル運動、および近代化・人口流出に伴い、大きく変化してきており、それについて村落景観も大きく変貌をとげている。

4. まとめ

本稿において筆者は、韓国村落の景観、および地縁的結合を研究する際の一助となると考えられる、「共同的要素」について、基礎的な作業を行った。すなわち、筆者の参加した予備的な調査の調査結果に基づき、主要な共同的要素を取り上げ、①それらについて整理・把握し、②歴史的変遷について考察し、③堂山、茅亭の2つの要素の形態や分布の地理的相違について調査結果をもとに考察を加え、堂山の形態の地域的分布、さらに茅亭の地域的な偏りについて明らかにした。

但し最後に述べた地域的相違をとらえるために用いた調査結果は、予備的な調査であったため完全なものとはいえないが、おおまかな傾向を捉えることはできたと考えられる。

また本稿で行った基礎的な作業によって韓国的一般の村落像の一端をとらえることができたと思われる。

〔付記〕本稿は、1990年度日本地理学会春期学術大会における発表の一部を加筆・修正したものである。また、本稿で利用した韓国村落に関する予備的調査は、崔宗鉉（漢陽大学校）、白砂剛二（長崎総合科学大学）、齊木崇人（筑波大学）、李暎一（神戸大学）との共同研究で行われたものであり、本報告の文責は筆者に帰する。

注

- 1) 韓国における同族集団を規定する最低の条件で、同じ姓で祖先の出身地・縁故地を表す「本貫」が同じであること。一般に地名・姓氏の順で示し、たとえば「金海金氏（地名+姓氏）」というように表す。

- 2) 祖先祭祀のための「祠堂」、一族の中の孝子烈女などを祭る「碑閣（顯彰碑）」などがある。研究としては、朴鐘煥「同族部落の形成過程および文化景観の特色—安東全州柳氏の同族部落を中心に—」（韓国語）、熊津地理11、などがあげられる。
- 3) 村落全体で行う祭祀であり、堂祭、部落祭など、さまざまな呼称が存在するが、ここでは最も一般的と思われる「洞祭」で統一する。
- 4) 張保雄は物理的な施設などを指す「有形的要素」と洞祭、祖先祭祀などを指す「無形的要素」に同族部落の景観を分類しつつ述べている。張保雄「全南地方の同族部落の構造と機能」（韓国語）、地理學27、22-27頁。
- 5) 崔在錫 伊藤亜人・嶋陸奥彦訳『韓国農村社会研究』、学生社、1979、29頁。
- 6) 筆者は、1987年8月、11月、1988年3月、7月の4回にわたって各々7日から10日程度の予備的調査を、共同で行っており、本稿もその成果の一部を利用したものである。
- 7) 山田正浩「李朝時代（朝鮮時代）村落の基本的構成要素とその機能について」、愛知県立大学文学部論集36、1988、102頁。
- 8) 伊藤亜人「韓国農村社会の一面—全羅南道珍島にて—」、（中根千枝編『韓国農村の家族と祭儀』、東京大学出版会、1973所収）、155-156頁。
- 9) 風水地理説は、よりよい住宅、都市・村落、墓の立地を追求するための方法を示すもので、よい村落を選ぶ際にはよい形をした鎮山をその背後に選ばねばならないとされている。
- 10) 村山智順『朝鮮の風水』、1931、図書刊行会（復刻）、747頁。
- 11) 柳濟憲「農村景観の形態的研究—驪州・利川地方を中心にして—」（韓国語）、地理學論叢6、99頁。
- 12) 金徳鉉「伝統村落の洞蔽に関する研究」（韓国語）、地理学論叢13、29-45頁。
- 13) 前掲2)、22頁。
- 14) 洪慶姫『村落地理学』（韓国語）、1986、法文社、502頁。
- 15) カン・ソンジュン（강선중）「農村自然村落の普遍的構造」（韓国語）、建築と環境、1986、27頁。
- 16) 前掲6)、102頁。
- 17) 前掲12)、99頁。
- 18) 伊藤亜人ほか『もっと知りたい韓国』、1985、弘文社、266頁。
- 19) 前掲2)、22頁。